創世ホール通信 No.265

催し案内＋文化ジャーナル
2017年2月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎

四方田犬彦◎講演会
白土三平の作品世界
漫画家生活60年を祝福する

2月12日（日） 14時半～（開場14時）

会場●3階多目的ホール　入場無料

講師●**四方田犬彦**（映画史・比較文学研究家。詩人。エッセイスト　神奈川県横浜市在住　63歳）

主催●北島町立図書館・創世ホール（☎088・698・1100）

特別協賛●㈱筑摩書房、㈱青林工藝舎

■我が国を代表する漫画家・白土三平。そのまぎれもない偉業を、俊才・四方田犬彦が四国徳島の地で縦横に語る奇跡の催し、ここに実現。興奮必至！　感動必至！多数ご参集下さい■恒例の創世ホール講演会に、ついに四方田犬彦氏が登場。2017年に漫画家生活60周年を迎える孤高の漫画家・白土三平の作品世界に迫ります。この時期、この種の講演会が実現できるのは日本で唯一北島町創世ホールのみです。圧倒的興奮でご期待下さい！

第百回◎外国絵本のおはなし会
インドネシアの絵本

2月25日（土） 14時半～

会場●2階ハイビジョン・シアター　無料

講師●クリスティン・オクト・ヴェロニカさん、デウィ・アンディニングラムさん（二人ともインドネシア出身、鳴門教育大学教員研修留学生）

内容●インドネシアの絵本の読み聞かせ

東北応援チャリティ公演
大地のうた⑦～原点～

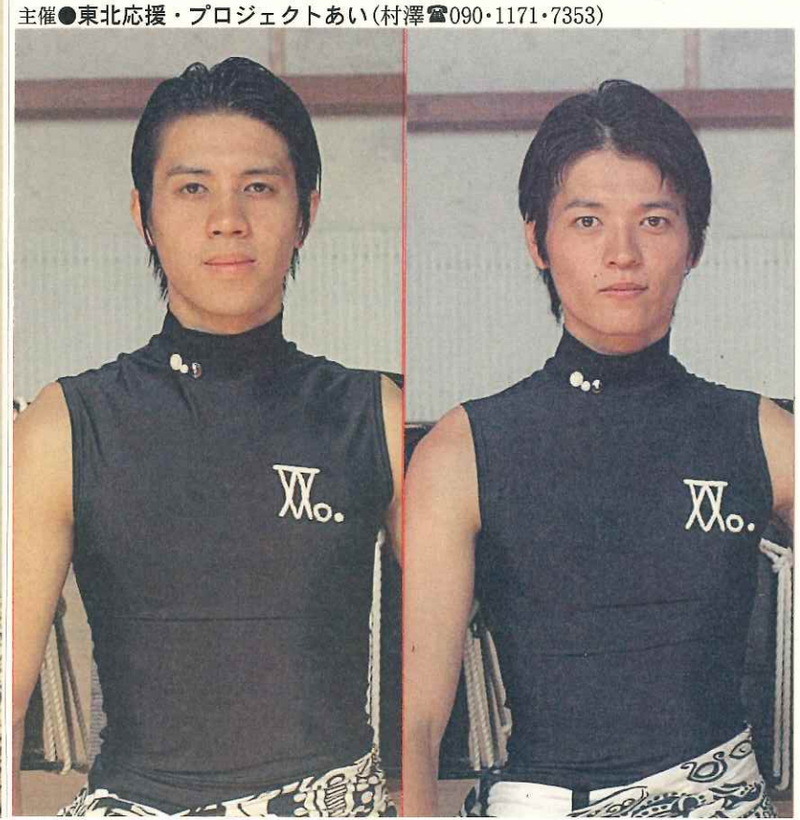
3月5日（日） 14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●1500円（前売当日共）

出演●Atoa.（アトア　高橋勅雄〔ときお〕、高橋亮〔あきら〕和太鼓、仙台、元鼓童）、阿部一成（篠笛、愛媛、元鼓童）、竹繁文章（津軽三味線、吉野川市）、高橋宏徳（剣舞）、桧獅子舞保存会（獅子舞、鳴門市）、鴨島鳳翔太鼓（和太鼓、吉野川市）、亀本美砂（インド古典舞踊）、武田仁美（ソプラノ）、小川典子（ソプラノ）、川真田加穂里（ソプラノ）、粟田美佐（ピアノ）

主催●東北応援・プロジェクトあい（村澤☎090・1171・7353）



笑福亭たま・旭堂南湖二人会⑩

3月19日（日） 14時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売／大学生・一般1500円、小・中・高校生1000円（当日各500円増）

出演●**笑福亭たま**（上方落語家）、**旭堂南湖**（上方講談師）

演目●落語「らくだ」ほか1席（お楽しみ）、講談「難波戦記」ほか1席（お楽しみ）

主催●たま・南湖二人会実行委員会（☎088・698・1100）

■毎度おなじみ上方演芸界を背負う2人のプリンス笑福亭たまと旭堂南湖（きょくどう・なんこ）、ついに迎える10回目の二人会。今回も超満員必至！　健康増進・抱腹絶倒！　お見逃しなく。

■【講談「難波戦記」とは】◎15万の兵を率いる徳川家康を死の直前まで追い詰めた一人の男◎その名は上田の城主・真田左衛門尉海野幸村（さなださえもんのすけうんのゆきむら）！◎江戸時代より語り継がれるもう一つの結末――◎かつて徳川幕府に禁じられたある書物がひそかな人気を集めておりました◎それは戦国最後の大戦（おおいくさ）で真田幸村が恐れ多くも大御所・徳川家康公に立ち向かったお話◎あの真田丸の戦いの裏でいったい何が起きていたのでありましょうか◎禁じられた書物の禁じられたお話◎さあ、江戸時代より語り継がれる講談「難波戦記」をお聞かせいたしましょう。（旭堂南湖主演映画「講談難波戦記」予告編から謹んで抜粋引用）

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

四方田犬彦さん講演会「白土三平の作品世界」にご期待下さい（続）●小西昌幸

■前号で、2・12四方田犬彦さん講演会への期待と関連づけて、白土三平さんの短編作品の魅力についての紹介と、つたない感想文のようなものを書いてみました。印象深い白土作品はたくさんあるので、今号はその続きを書いてみます。

■高３の頃（1973年）だったと思うのですが、徳島市内の高校に進学した友人から、貸本マンガが大量に徳島市内の古本屋さんにあるという情報がもたらされました（私は鳴門高校へ北島町から自転車で片道45分かけて通っていた）。

■私は、1973年の夏に『ガロ』を定期購読し始めました。確か自転車で阿波踊りを見に行った帰りに、徳島市の吉野橋の手前の村田書店で買ったと思います。何日か逡巡し、決心して購入したのでした。林静一さんの美しいペン画が表紙の号でした。私は中学１年のとき『ＣＯＭ』を初めて買って以降、自分は『ＣＯＭ』派だと認識していたのですが、既に『ＣＯＭ』はありませんでした。高３の頃『つげ義春作品集』（青林堂）や、『美術手帖』での赤瀬川原平さんの連載によって、描線の多い黒い画面の漫画作品に魅了され、以後、『ガロ』の世界に分け入り、同誌を買い続けることになります（大学進学後は、『ガロ』バックナンバー・セットをコツコツと集めてゆきました。納屋の書庫には1966年12月号から90年代の休刊号まで揃っていると思います）。

■友人から、徳島市内の貸本マンガがある古書店や現役で営業中の貸本店数店、その他貸本マンガが置いてある八百屋さんやお好み焼き店（貸本店からから脱却を図ろうとしていたのではないかと推測。あるいは貸本店の名残を残したままの混沌とした店舗状況だった？）を数店、合計でざっと10店舗ほど教えてもらいました。今考えると奇跡のようなことですが当時（1973年頃）は、徳島県内には貸本屋さんもまだ残っていて、それ以外の店でも貸本マンガを手に取ることができたのです。特に佐古駅前のお店は立派な現役バリバリの貸本店でした（74～75年頃閉店？）。このあたりの回顧録は、いくらでも文章があふれてきそうなので、別の機会に譲ることとして省略します。1978年に私の書状がもとで、北冬書房の高野さんご一行が徳島に来て、本県における根こそぎの貸本マンガのサルベージが完了したことのみ記しておきます。

■友人が水木しげるの貸本マンガ数点は既に発掘入手していて（確か１冊50円で購入）、私は、白土さんの作品集『大上段絶命』（1959）を発掘しました。蔵本堂書店だったと思います。同店の棚には30円の貸本古書と50円の貸本古書が全部で70冊以上ありました。『大上段絶命』は裸本（カバーなし）でしたが、今も大切な宝物です。30円だったと思います。

■表題作は、復讐譚です。ある女性剣士が、修行を積んで敵（かたき）と狙う剣豪と対決します。しかし彼女は、結核を病んでおり、決闘中に喀血し、善戦むなしく倒されますが、相手にも手傷を追わせます。その時一人の乞食の老人が敵の剣士に近寄って傷口に触れようとします。乞食は斬り捨てられ、命を落とします。実は、彼（乞食の老人）の行動には理由がありました。かつて彼は、女性剣士に以前やさしく施（ほどこ）しを受けたことがあったのです。たまたま、女性剣士がかたき討ちに立ち向かう場面を目撃し、しかし彼女の志は果たせず無念の最期を遂げるのを知った時、やむにやまれず彼なりに決起したのでした。彼は命がけで、敵のサムライに破傷風菌を塗り付けたのでした。ラストで、その敵のサムライが一か月の間、苦しみながら命を落としたことが語られます。志半ばで倒れた女性剣士の無念を引き継いだ老乞食の命がけの復讐は、見事に成就したのです。前回ご紹介した「ざしきわらし」の老忍・ダンズリの小助は見事に戦いましたが、この年老いた乞食の女性剣士への恩に報いる戦いも、誠に誠に見事であった。私は高く評価したい（断固支持したい）と思います。楳図かずおさんの大傑作『復讐鬼人』の終章部分も本作の系譜に連なる作品と言ってよいと思います。つまりとことん迫害された最底辺の人間による、命をかけた破邪顕正の戦いの凄絶さと、その核心部分における美しさというテーマであります。（「大上段絶命」は後に『小学館叢書　白土三平初期傑作集３　死神少年キム』〔1996年11月、小学館〕に収録）

■『忍者武芸帳』で、自分が死んでも必ず第二第三の影丸が登場するであろうと語り、世の中をよりよくするために人は生きがいを見出し、力を発揮する。その時命をかけることさえある、という趣旨の対話がなされます（影丸と林崎甚助の対話）。何かを成就させんとする場合、それは時に命がけのものとなるが、高潔な精神によって志は別の人間に引き継がれる。「大上段絶命」では、この年老いた乞食の決起によって、女性剣士の悲願は成就しました。志が引き継がれた実例が表現されているわけです。

■よく似た事例として、私は山田風太郎『柳生忍法帖』のひとつのエピソードを想起しました。同作は、夫や父をむごたらしく殺された女性たち（妻や娘たち）の復讐を達成させるために柳生十兵衛が手助けをする波乱万丈の一大活劇ですが、その中に老僧侶が命を賭して敵に立ち向かう場面があります。獰猛屈強な一人の敵に対して二人のか弱い僧侶（女性たちのサポーターとして志願）が挑んだ戦術は、自分たちが脳天を砕かれ一瞬で絶命するその寸前にそれぞれが敵の片腕にしがみつき、死後硬直を利用して、その腕を決して離さないというものでした。その隙に女性たちは復讐をとげるのです。この逸話を私は評価し、終生胸に刻んでいる者ですが（日下三蔵さんが徳島入りされたとき、語り合ったことがあります）、「大上段絶命」における老乞食の戦いもまた『柳生忍法帖』における僧侶の戦いのごとく尊く輝いていたと思います。

■初期短編「人身沼」（1960年）もずっと心に残っています（ゴールデン・コミックス版『忍法秘話』８巻に収録）。「天下泰平、万民の幸せのため」という名目で統治支配を続けてきた領主と、彼にひたすら仕え続ける青年忍者がいて、あるとき青年忍者は捕縛した敵の女忍者を刺し殺すよう命令されます。実は彼女は実の姉でした。「天下泰平、万民の幸せのため」というお題目で姉を殺した青年の心には、徐々に疑問がわき起こります。青年は任務遂行のため、片腕さえ失っています。そして物語のラストで、大雨が降り領地の沼の底を２人分の人柱でふさぐ必要が出てきた時、青年忍者は、とっさに「天下泰平、万民の幸せのため」とつぶやき、いやがる領主をはがいじめし、２人は沼に身を投げ、人柱となって水没するのです。痛烈な皮肉が効いていました。

■連作短編集『忍法秘話』の「艶鰈偃潢（いしみつ）」は全６章からなっています。これは古来より伝えられる「艶鰈偃潢」という不老長寿の霊薬をめぐる巻物や薬剤の争奪戦を描いた短編群です。平安時代から江戸時代までの４つの物語が描かれます（約千年のクロニクル）。その第２章「四鬼（よんき）の巻」では、不老不死研究を続けてきた藤原千方（ふじわらのちかた）という老人が、終盤、次のように語ります。「祖父、父、わしの三代にわたって不老長寿の仙薬丹薬をてがけためして来たこれがその記録だ」／「ただなすこともなく、長く生きながらえることなぞくだらぬわ。今ごろ気づくとは」／「ちまたには疫病がまんえんし、行き倒れが路上にあふれ、百姓はやせた土地にしがみつき、むちの下にあえいでいる」／「しかるに貴族どもは、なすこともなく美食によい、歌などにうつつをぬかしている」。藤原千万（ふじわらのちかた）は変装を解き、老人から髪をなびかせた不敵なつらがまえの壮年の武士の姿になります。そして彼は、次のように高らかに宣言するのです。「このくさりきった世に一風ふかせてやるか!!」――彼の背後には４人の忍者（四鬼）がひかえています。最後のナレーションで、平将門、藤原純友の乱についで藤原千方が反乱を起こしたのはそれから間もなくのことであった旨が語られます。私はこのお話が特に大好きで、いつ読んでも胸が熱くなります。藤原千方は三重県伊賀地方の人らしいです。三重県には、名張というところに私の大切な友人（中相作という江戸川乱歩研究の第一人者）が住んでいて、その人のことを私は思い浮かべたりしました（その人は理不尽な世の中にしょっちゅう立ち向かっていてカッコイイのです）。そういえば白土作品における重要登場人物の一人、四貫目の正式名称は《名張の四貫目》なのでした。

■「艶鰈偃潢（いしみつ）」第５、６章には「たまかぜ」に登場した老忍者オドのその後が描かれています。老人オドは両腕に包帯を巻き（両手首から先がないため。「たまかぜ」参照）、村人の尊敬を集める長老として、ミツバチを飼育し、ジャガイモや収量の多いイネの研究をしている存在です。いしみつとは蜂蜜（その核心としてのローヤルゼリー）であったことが明らかにされます。また戦闘シーンで無限流秘太刀タマカゼも披露されます。

■2016年11月13日に、当講演会の打ち合わせのためＪＲ保土ヶ谷駅の喫茶店で四方田さんにお会いした時、私はこの催しの企画者として藤原千方（ふじわらのちかた）のように意気軒高であること、すなわち「このくさりきった世に一風ふかしてやるか」にも通底する高揚した気分である旨をお伝えしました。この国に、文化施設はたくさんある。しかるに白土三平先生が漫画家生活60年という大きな節目を迎えられるその年に、なぜ、どこの施設の企画担当者（アート・プロデューサーともアート・マネージャーともいう）も白土三平先生を祝福する四方田犬彦講演会をやろうとしないのか、というような思いがあったわけです。「四方田先生、徳島の片田舎で先生の講演会をすることで、この国の文化状況にガツンと一発くらわせてやりましょう」。私は、藤原千方の志を背負いたいと思いました。それを聞いた四方田さんの顔に不敵な笑みが一瞬浮かんだようにみえました。

■講演会チラシに引用しましたが、『忍者武芸帳』で、ついに捕えられ八つ裂きの刑で処刑される直前、影丸は森蘭丸に向けて無声伝心の法で「われらは遠くから来た。そして遠くまで行くのだ…」というメッセージを送ります。この講演会「白土三平の作品世界」が、あと何年かしたら伝説の催しとなることは確実であります。今日、種村季弘さんや九條今日子さんや柴野拓美さんや竹内博さんの北島町創世ホールでの講演会が、既に伝説になっているように。実は四方田さんは、数年前に脳腫瘍の大手術をされています。そして企画者の私は、2016年３月末に定年退職し、現在は嘱託職員として週４日勤務するという立場の人間です。いま日本で、この時期、ここ北島町立図書館・創世ホールでしかこの催しはできなかったのであります。心ある皆さん、将来この講演会を思い出すとき、ぜひ『忍者武芸帳』の主人公の最期のメッセージもあわせて想起して欲しいと願います。その言葉とは、すなわち「われらは遠くから来た。そして遠くまで行くのだ…」。四方田犬彦さん講演会にご期待下さい。（2017年02月01日脱稿、文責＝小西昌幸）